



イスラームとの共生～ 1000年以上前から グローバル化している彼らと どう向き合うのか

打倒フセインを旗印にしたアメリカのイラク攻撃開始から、早くも8カ月余りが経過しました。フセイン政権は崩壊しましたが、このままいけば、アメリカの占領政策は失敗し、ブッシュ政権の命取りになるばかりか、ベトナム戦争の二の舞になりかねないと私は危惧しています。同時多発テロの報復としてのアフガニスタン侵攻もそうでしたが、アメリカが冒した最大の過ちは、ムスリム（イスラーム教徒）にとっての国を西欧的概念の「国家」として捉えていることです。確かに西欧諸国では、「国家」はそこに生まれ育った人間のアイデンティティの源です。でも、ムスリムはそうではありません。彼らにとっては、信徒であることが存在の根底にあり、極端に言えば「国家」は仮のすまいのようなものです。そのため、いまでもムスリムのあいだには、国家や民族を超えた同胞としての感覚があります。そして全世界のムスリムに共通する根源的な倫理観とは、やさしく言えば「弱いものいじめ」に対する怒りであり、弱者救済へのモチベーションの高さです。イスラーム世界を旅した人は、彼らが親切で豊かなホスピタリティの持ち主であることを知っていま

原点は、市井の人びとの肉声に耳を傾けること 人間への洞察を通じてグローバル・イシューにアプローチする

すが、そこにも、土地に不案内な「弱者」を助けようというイスラーム的倫理が反映されているのです。ムスリムは現在12～13億人、世界の人口の5分の1にもあたる人びとが、アメリカの強権的な政策をどう思っているかは自明の理といえるでしょう。

こうしたイスラーム世界のあり方、そして何より人間としてのムスリムの姿は、日本や西欧諸国では正確に理解されていません。世界がアメリカを中心としたグローバルスタンダードを肯定する方向へ向かい始めているいまこそ、私たちは西欧的視野から世界を見ることの危険性を認識し、世界と人間との関わりをもう一度しっかり見つめなおし、再構築する必要があります。いま生きている人びとへの洞察なしに、現実の問題を解くことはできません。一橋大学社会学研究科の目的は人間を通して社会を見ること、そして問題を解くためには何が必要なのか考えること。学問のための

学問では生きた問題を解決することはできませんし、人間を見失った学問には意味がないからです。世界の大学で初めて誕生した「社会学研究科地球社会研究専攻」の原点もここに 있습니다。地球社会研究専攻では、ごく普通の人びとの生活や生の声を通して学問を組み立て、人びとが抱える問題点とその解決方法まで考案していきたくと考えています。

「知のアトリエ」から プロダクツを世に問う～ 学部ゼミナールの実践

「市井の人びとの肉声」に耳を傾けるアプローチは、学部のゼミにも貫かれています。私のゼミでは学問と実践の比率は50対50。学生はゼミで知識をキッチリ学び、イスラーム地域にフィールドワークに出かけます。そこで出会った人々の声をもとに自ら考え、その成果を世に問うのです。こうしたproduct-orientedな姿勢は当初からですが、近年、表現方法を革新してきました。「映像にしたい」という学生の発案を採用し、現在ではVTR作品にしています。といっても、要求されるのは単なる学生レベルのビデオ・レポートではありません。私が出演するNHKの番組で放送できるクオリティが要求されます。OBの協力を得て、学生は機械の操作から編集方法まで学んでいきます。学生自身のプロダクツが「商品」として通用するレベルに達

するには、何が必要なのか。議論を重ね、試行錯誤を重ねながら自分たちの手で研究成果を生み出しています。

学問に加えて、成果の「商品化」まで実践するのは、学生たちにとって負担が多いように思えるかもしれません。また、自ら汗をかく手作りのアプローチは、泥臭くもみえるでしょう。しかし、日本の経済発展を支えたのは町工場の技術力であったように、学問の世界においても、町工場、あるいはアトリエ（工房）的な実践が大切だと思っています。事実、当ゼミの卒業生は机上の学問だけでは得ることのできない収穫と成長を手にして、巣立っていきます。このゼミで制作したVTRがNHKで放送され、社会的な評価を得ていることから、映像志向の学生がゼミへの参加を希望するようになりましたが、それだけではゼミに参加できません。私にとって、教育と研究の原点とは、あくまで人間を通して生きた問題に取り組みむことであり、映像作品は成果を世に問う手法の一つだからです。（談）